

「をちこち散歩」は2人の筆者が6回連載します

をちこち散歩

@Palestine

黒澤明のユアリティ

よもたいぬひこ
四方田犬彦

明治学院大学教授

昨

年は黒澤明が1954年に『七人の侍』を発表してから、ちょうど50年目にあたっていた。別にそのせいというわけでもないが、海外に足を向けるたびに、映画人から黒澤について尋ねられたり、教え

られることが多かった。

パレスチナでは、イスラエル軍による虐殺をドキュメンタリー映画で訴えたためにきわめて困難な場所に置かれてしまった映画監督と話をした。彼は黒澤の『どですかでん』を口をきわめて賞賛し、ガザを舞台にしたあるフィルムの

なかでその演出術に学ぶところがいかに大きかったかを語った。イスラエルでは、黒澤の描く人物たちがいかに能楽の所作事を継承しているかをめぐって、専門的な論文を手渡された。

セルビア・モンテネグロのある監督は、1972年にたまたまベオグラードを訪れた黒澤にインタビューしたことが一生の転機となったと語った。彼はその後サラエヴォで黒澤をめぐる博士論文の執筆にとりかかったが、完成直前に戦争のためすべてを諦めなければならなかった。論文と資料のすべてを置き去りにして、ボスニアを脱出しなければならなかった。彼の内面では、コソヴォの地にあってアルバニア人の横暴に苦しむセルビア系とは『七人の侍』の

農民たちであり、彼らを救おうとしたセルビアの軍司令官は侍大将の勤兵衛に当たっていた。それなのに、なぜ彼らが戦犯としてハーグの国際司法裁判所に送られなければならないのかというのが、この監督の悲憤慷慨の原因だった。

わたしの行く先々で、映画人は自分たちの困難な状況を語った。そのさい分光器として採用されるのが『七人の侍』だった。日本の乱世を舞台としたこのフィルムは、彼らの歴史解釈、政治解釈に大きな原型を与えているのだった。黒澤明は、けっして日本人やアメリカ人が考えているような、偉大な古典監督などではなかった。彼は現実の状況を理解するために必要な、アクチュアリティそのものとして考えられていたのである。☺